思いやりの愛語

鳥取県　瑞仙寺　徒弟　長曽靖史

皆様は「愛語」という言葉を、お聞きになったことがありますか。「愛語」とは、優しい心で相手を思いやる言葉をかけることです。

私が学生の頃、ちょっと話の長い校長先生がおられました。気の利いた楽しい話をしてくださるので、個人的には好きな先生だったのですが、話が長くて苦手だという生徒もいたような気がします。

そんな校長先生が、体育祭の閉会式でこのような挨拶をされました「今日は、皆さんもうくたくたでしょうから、長い話はしません。お疲れ様でした。皆、頑張ったね！」たった十秒にも満たない短い挨拶でしたが、拍手喝采が起こりました。間違いなく、校長先生の挨拶の最短記録でしたが、ここまで全校生徒の心に染みわたった言葉は、かつてなかったことでしょう。

相手の立場に寄り添い、思いやって言葉をかけることが「愛語」です。このときの校長先生の挨拶には、短い言葉の中にも体育祭を終えた生徒たちを労う「愛語」の精神が込められていました。「愛語」の精神で言葉を交わしているとき、私たちの心は菩薩様のように穏やかな心の形になっています。お互いに「愛語」を用いたコミュニケーションは、自分も相手も笑顔にします。人の心を慈しむ「愛語」には、人を幸せにする力があるのです。

しかしながら、昨今の世の中では、ＳＮＳなどでの誹謗中傷が問題になっています。パリで行われたオリンピックは、多くの感動をもたらしましたが、その一方、インターネット上で選手たちに心無い誹謗中傷をあびせる行為が、世界的に問題となりました。悪意のある言葉で人を傷つけ、時には人の命まで奪ってしまうこともあります。相手の立場に寄り添い敬う、「愛語」の精神とは真逆のことで実に悲しい話です。

挨拶でも、文書でも、ネット上の発信でも、どのような形であれ人が発した言葉は、人が受け取った時点で意味を持ちます。言葉をかける時、発信するとき、受け取る人を慈しむ「愛語」の精神を忘れないようにしたいものです。